

中国における『智度論』受容

采 翠 晃

北魏末に道場が出て以来、特に北地において『智度論』研究が大変な隆盛を見た。⁽¹⁾しかし、道場を溯る半世紀以上の間、『智度論』研究に関する有意な記事を見出し得ない。では、この断絶以前と以後とは、『智度論』の研究態度に違いがあるのであろうか。

この断絶以前である、訳出直後の『智度論』受容の様子を探究するのに好適なのは『大乘大義章』である。言うまでもなく、『大乘大義章』は鳩摩羅什と廬山慧遠の往復書簡を編集したものであるが、ここでは、両者とも、大乘思想を説明するのに『智度論』を多用して議論を展開している。

慧遠の意図は、師・釈道安の後を承け、安世高以来の小乗仏教と羅什によつてもたらされた大乘仏教とを統合しようとすることにあつた。慧遠が『智度論』を大乘仏教を代表する論書として重用したことは、『智度論』の序文を書いたのみならず、わざわざ『大智論抄』二十巻を著していることから十分に窺える。その『智度論』の訳出者である羅什は、慧

遠が大乘思想について問い尋ねるには最高の教師である筈であつた。

しかし、『大乘大義章』に見られるような議論にもかかわらず、次のことから、慧遠が羅什の意見に納得したとは考えられない。

慧遠は、『大乘大義章』の議論の後に記した「廬山出修行方便禪經統序」で、鳩摩羅什が中心となつて広めている禪法を「不融」と批判しているからである。⁽²⁾慧遠は、羅什訳『坐禪三昧經』は有益なところも無いではないがまだまだ不十分なものであると述べ、羅什とその周辺を批判しているのである。しかるに、慧遠が仏陀跋陀羅に請うて訳出せしめた『達磨多羅禪經』は達磨多羅と仏大先が受持したものであつた。⁽³⁾達磨多羅と仏大先は共に罽賓の有部の禪師であり、いわば小乗と目される人々であつた。

羅什も罽賓・沙勒滞在時に有部の師につき教えを受けたと伝えられるが、⁽⁴⁾羅什の大乘思想はむしろ反小乗とも言うべき

ものであり、慧遠の態度とは好対照を見せている。これは『大乘大義章』における羅什の答え方にも見られる。典型的なのは次の二ヶ所である。

真法身の仏が本習の残気を尽くすのに三十四心を経るのかと慧遠が問うたのに対し、羅什はそれらを「皆仏説に非ず」と退けている⁽⁵⁾。また、慧遠が四相について問うたのに対し、羅什は、これに対しても「迦旃延弟子の意にして仏の所説に非ず」と退けているのである⁽⁶⁾。

慧遠は、阿毘達摩論書にもとづいて問いを発しているのであるが、それを「仏説に非ず」と無下に否定されたのでは、その問いをそれ以上深めることもできず、違った角度から問いなおすより他なかった。慧遠にとっては、大乘と小乗は矛盾なく統合されなければならなかった⁽⁷⁾。しかし、羅什にとつては、小乗仏教はあくまで切り捨てられるべきものに過ぎなかったのである。

しかるに、慧遠が何故かくまでも大乘と小乗の統合にこだわるのかと言え、それは般舟三昧実践上の要請からであった⁽⁸⁾。従つて、『智度論』に対する態度も、同様に実践的な立場からのものであった。では、羅什の周辺にいた人物からは、『智度論』はどのような位置を与えられていたのであろうか。

羅什直近の者としては、僧叡を先ず挙げねばならない。僧叡はそれまでに訳出されていた禅経に不満を抱いており、四〇

一年十二月二十日に羅什が長安に至るや、同月二十六日には駆けつけて禅定の指導を受けた⁽⁹⁾。翌月弘始四年（四〇二年）正月五日には『坐禅三昧経』が訳出されているのは、禅定指南を待ち望んでいたのは僧叡一人ではなかったことを表わすと言つていいであろう。「大哉禅智之業。可不務乎⁽¹⁰⁾」とは、新たな禅定の指針を獲た喜びの声に他ならない。

しかし、『智度論』に対する態度は、あくまで「智典（般若経）」の注釈書としての域を出ることはなかったようである。また、長安において、『智度論』の研究が専門的に行われたことを示すものが現在ほとんど伝わっていない。わずかに僧肇に『大智度論抄（疏）』八巻があつたと伝えられているのみである。もつとも、現在これは伝わっておらず、僧肇が実際に抄疏を著わしたのかどうかさえ決定しがたい。

訳出直後においては、慧遠を除いて、概して『智度論』に比較的冷淡であつた。あるいは、この冷淡さが、後の『智度論』研究の空白を生んだとすら言えよう。

しかるに、空白の後に『智度論』研究が再び流行するのだが、これはほとんど北地に限られる。吉蔵は『大品経』の疏は著わしたものの、『智度論』に関しては終に一編の書も著していない。また、陳の慧遠は、『肇論序』において『中論』・『百論』・『十二門論』のみを挙げるだけで、『智度論』に関しては全く触れていないのである⁽¹¹⁾。

では、何故南方ではなく北方なのであろうか。南方に無く
て北方にあったものとしては、『智度論』研究の他に、禪定と
阿毘達摩研究が挙げられる。この三つが独立して流行したと
は考え難く、何らかの相関関係があったと見なくてはならない。

ところで、羅什以降徹底した大乘主義が伝えられてきた中
にあって阿毘達摩研究とはいささか奇異に感じられる。しか
るに、北方で仏教界の指導的立場にあった志念が『智度論』
を講じた後に、『雑阿毘達摩研究論』を講じるようにしてい
た⁽¹⁷⁾ことを考え併せると、阿毘達摩研究は大乘基礎学であつた
のではない。当時でも大乘は小乗より上位に位置づけられて
おり、小乗研究者が仏教界の指導的立場に立てるとは考え難
い。むしろ、阿毘達摩は大乘として研究されていたのではな
いだらうか。『智度論』が説く禪定体系は伝統的な四念処観
などを大乘精神の上に定義づけしなおしたものといえるが、
それらを具体的に実践していくに当たって阿毘達摩を参照し
たと考えるのが最も無理がないように思われる。

先学は、智顛の法華学の特徴を『智度論』からの脱却にあ
ると言う。逆に言えば、道場以降智顛にいたるまで、『智度
論』が中国の仏教界の中で中心的な地位を占めていたという
ことである。その関心のほとんどが実践からの要請に依るも
のであつた。⁽¹⁹⁾これは慧遠の態度と一致するものである。慧遠
没後、その学系は顕かではないが、たとえ表に現われなくとも、

脈々と受け継がれてきたのだと言えよう。

- 1 新出続藏四六・九一二c
- 2 大正五五・六五cく六六a
- 3 大正五五・六六a
- 4 大正五五・一〇〇b、大正五〇・三三〇b
- 5 大正四五・一三〇cく一三一a
- 6 大正四五・一三五aくb
- 7 大正五五・六五c
- 8 安藤俊雄「廬山慧遠の禅思想」木村英一編『慧遠研究研究篇』
大正五五・七五c
- 9 大正五五・六五a
- 10 大正五五・六五b
- 11 大正五五・七四c
- 12 大正五五・一一五六a
- 13 大正四五・一五〇b
- 14 大正五〇・五六三cく五六四a
- 15 大正三三・九五一a
- 16 大正五〇・五〇九a
- 17 安藤俊雄「天台宗の開創」『天台学』第二章
抽稿「北朝における『智度論』受容」『大谷大学大学院研究紀
要』一五

〈キーワード〉慧遠（廬山）、『大乘大義章』、実践

（大谷大学特別研修員）